

物語文章における会話文枠組みの構成について

桃内 佳雄

北海道大学工学部 情報工学専攻

会話文は、物語文章中で、その物語に登場する物が話したり思ったりすることを表現するためにしばしば用いられ、物語文章理解システムの構築にとってその解析は重要である。本報告では、物語文章中の会話文解析の第一歩として、会話文を主要構成要素とする会話文枠組みの構成について考察する。会話文枠組みは、会話主体、会話相手、会話文、そして述部をその基本構成要素とするもので、文章の意味構造を構成する一つの単位となる。まず、会話文とそれに隣接する地の文章との間の関連のパターンを分類する。その分類に基づいて、会話文を中心として会話文枠組みを構成してゆくための骨組み的な手続きを構成する。その手続きで特に重要な処理は、二つに分割されている会話文を一つにまとめる処理と省略されている会話文枠組み構成要素の復元処理である。考察は、日本語の物語からの例に基づいて進められる。

Constructing the Frame for Direct Speech in Japanese Narrative Text

Yoshio MOMOUCHI

Division of Information Engineering

Faculty of Engineering, Hokkaido University, Sapporo, 060, JAPAN

Direct speech in Japanese narrative texts is quoted by enclosing with 「 and 」、and embedded in background sentences. The frame for direct speech, a version of sentence frame, consists of speaker, addressee, direct speech and predicate.

We examine some relations of direct speech to background sentences and some cues for integrating direct speech splitted into two parts in Japanese narrative texts. A skelton procedure for constructing the frame for direct speech is shown. Context information for restoring ellipted elements in the frame is considered.

1. はじめに

会話文は、物語文章中で、その物語に登場する物が話したり思ったりすることを表現するためにしばしば用いられ、物語文章理解システムの構築にとってその解析は重要である。本報告では、物語文章中の会話文解析の第一歩として、小学校一、二年生の国語教科書中の物語文章に現れる会話文の調査に基づいて、会話文を主要構成要素とする会話文枠組みの構成について考察する。会話文枠組みは、会話主体、会話相手、会話文、そして述部をその基本構成要素とするもので、文章の意味構造を構成する一つの単位となると考える。まず、会話文とそれに隣接する地の文章との間の関連のパターンを分類する。その分類に基づいて、会話文を中心として会話文枠組みを構成してゆくための骨組的な手続きを構成する。その処理で特に重要なのは、二つに分割されている会話文を一つにまとめる処理と省略されている会話文枠組み構成要素の復元処理である。調査資料は、「教育出版株式会社、昭和59年発行、改訂しようがくこくご、1上・下、2上・下」中の文章である。

2. 会話文に対する枠組み

会話文は、次の例に示すように、「」で括られ、地の文章に埋め込まれた形で文章中に現れる。

- <1> a. 「ねがいというのは、なんじゃ。はやくいえ。」と、てんぐはえらそうにいいました。
b. そこで、おひゃくしょうは、「てんぐさまは、どんなすがたにでもかわれるということですね。わたしも、あなたにたべられるまえに、それを見たいとおもいます。」といいました。

文章<1>における登場物は、「おひゃくしょう」と「てんぐ」である。会話文は「」と「」引用されている。会話文以外の部分が地の文章である。

本報告では、物語文章における会話文解析の第一ステップを、会話文を一つの連用修飾語句とする次のような形の枠組みを構成することと考える。

【<会話主体が>、<会話相手に>、「…」と、<述部>】。

このような枠組みを会話文枠組みと呼ぶ。上の文章<1>からは、次のような二つの会話文枠組みが構成される。

a: [<てんぐは(が)>、{<おひゃくしょうに>}、(えらそうに), 「…」と、<いいました>]

b: [<おひゃくしょうは(が)>、{<てんぐに>}、 「…」と、<いいました>]

<> : 必須構成要素(「…」とも必須構成要素)。

() : 任意構成要素。

{<>} : 省略されている必須構成要素(文脈情報の利用により復元)。

会話文枠組みは、会話文を引用格要素とする述語の格フレームをその基本的骨組みとして構成される。会話文を引用格要素としてとりうる述語を会話述語とよび、会話述語を含む文を会話述語文とよぶことにする。実際の物語文章では、会話文と隣接する地の文章中に、会話文枠組みの必須構成要素である、<会話主体>、<会話相手>そして<述部>に対応するすべての表現が現れるわけではなく、文脈に依存した様々なパターンが存在する。会話文枠組みの構成において、もしそれらの表現が省略されている場合には、文脈情報を利用しながらそれらに対応する要素の復元処理を行わなければならない。たとえば、上の文章<1>でも、a、bともに<会話相手>に対応する表現が省略されている。

3. 会話文と地の文章との関係

会話文と地の文章との関係については、様々な視点からの考察を行わなければならないと思われるが、本章で

は、会話文枠組みの構成手続きと関連して、主として、会話文と地の文章との構文的関係について検討する。本報告では、物語文章における会話文と地の文章との構文的関係を次のように分類した。述語は“言う”で代表させる。

〔Ⅰ〕 会話文を“「…」と”という形の連用修飾語句として埋め込める文が地の文章の中に存在する場合

(1) ”と”引用

(1. 1) : 「…」と言いました。

(1. 2) : 「…」と・・・ (“言う”を含まない)・・・ : 述部省略”と”引用

(2) 指示引用

(2. 1) : 「…」　　そう言いながら、・・・ : 前方指示引用

(2. 2) : ……こう言いました。「…」 : 後方指示引用

(3) ”零”引用

(3. 1) : 「…」　　・・・言いました。 : 前方零引用

(3. 2) : ……言いました。「…」 : 後方零引用

(3. 3) : 「…」　　・・・言いました。 「…」 : 前後方零引用

〔Ⅱ〕 会話文を埋め込める文が地の文章の中に存在しない場合

(4) 独立引用: …… 「…」 …… (前あるいは後の文が、別な会話文に対する会話述語文、あるいは会話文である場合もある)

各類型の例を示そう。

- (1. 1) : <1> a. 「ねがいというのは、なんじゃ。はやくいえ。」と、てんぐはえらそうにいました。
(1. 2) : <2> 「さあ、食べろ、食べろ。のんでくれ、のんでおくれ。」と、ぞうの足にだきすがりました。
(2. 1) : <3> 「あめがふったらボンボロロン……………」　　そういいながら、おじさんとかさは、あめの中にはいってしまいました。
(2. 2) : (調査資料である’しょうがくこくご・1-2年’文章中には例が存在しなかったが、永野(文献1)には次のような例が示されている: 彼はこうつけ加えた。「これで打ち切り。」)
(3. 1) : <4> 「けんかをやめろ。」　　お日さまがいました。
(3. 2) : <5> ことりたちが、くちぐちにいました。　　「お日さま。はやくくもをよんで、あめをふらせてください。わたしたちもよびにいきますから。」
(3. 3) : <6> 「がまくん。」　　かえるくんがいました。　　「ひょっとして、だれかがきみにてがみをくれるかもしれないだろう。」
(4) : <7> かみづつみのねっこをあなにうめて、トントンとたたきました。　　「そうだ、水もやらなくちゃ。」　　コンは、じぶんのあなにとんでかえって、青いコップをもってきました。

〔Ⅰ〕については、会話文を埋め込むことのできる地の文を基礎として会話文枠組みを構成することができる。

〔Ⅱ〕については、そのような基礎は存在せず、会話文以外のすべての必須構成要素の復元処理を行わなければならない。

4. 会話文枠組みを構成するための骨組み的手続き

3章での構文的関係の分類に基づいて、会話文枠組みを構成するための骨組みの手続きについて考察する。枠組み構成手続きは、3章の{ (1), (2) }類と{ (3), (4) }類とで、その処理のための手がかりにおいて大きく異なる。前者については、会話文を埋め込むべき地の文の同定のために、助詞”と”や指示詞などの

文法的手がかりを利用することができるが、後者については、そのような明白な文法的手がかりは存在しない。
{(3), (4)} 類も実は(3)と(4)では、会話を埋め込むべき文が地の文章中に存在するかしらないかという大きな相違が存在する。

文章を最初の文から順番に処理しながら文の枠組みを構成してゆくという文章解析過程について考え、その中で会話文枠組み構成手続きの骨組みについて考えてみよう。下に会話文枠組み構成のための骨組みの手続きを示す。手続きは会話文の処理に注目して記述する。手続き記述中での”会話文”は”と”引用されていない会話文とし、”会話述語文”は会話を”と”引用していない会話述語文とする。いま、処理すべき一つの文を与えられたとして手続きに入る。処理の最初の大きな分岐点は、処理すべき文が会話文であるかそうでないかということである。”a+”はaである場合、”a-”はaでない場合を意味し、また、単に”前文へ埋め込む”などという処理は、処理中の文を対象とする。

[1] 会話文+:

[1.1] 前文が会話述語文+:

[1.1.1] 前文が会話後方指示引用文+: 前文へ埋め込む。

[1.1.2] 前文が会話後方指示引用文-:

[1.1.2.1] 前前文が会話文+:

[1.1.2.1.1] 前文へ前前文と共に埋め込み可+: 前前文と処理中の会話を結合して前文へ埋め込む。

[1.1.2.1.2] 前文へ前前文と共に埋め込み可-:

[1.1.2.1.2.1] 前文へ埋め込み可+: 前前文を独立引用とし、
処理中の会話を前文へ埋め込む。

[1.1.2.1.2.2] 前文へ埋め込み可-: 前前文を前文へ埋め込み、
処理中の会話を保持する。
(\$ 独立引用)

[1.1.2.2] 前前文が会話文-: 前文へ埋め込む。

[1.2] 前文が会話述語文-:

[1.2.1] 前文が会話文+: 前文を独立引用とし、処理中の会話を保持する。
(\$ 独立引用)

[1.2.2] 前文が会話文-: 処理中の会話を保持する。
(\$ 独立引用)

[2] 会話文-:

[2.1] 会話を”と”引用している文+:

[2.1.1] 会話述語が顕在+: その”と”引用文へ埋め込む。

[2.1.2] 会話述語が顕在-: 述部省略”と”引用とする。

[2.2] 会話を”と”引用している文-:

[2.2.1] 会話述語文+:

[2.2.1.1] 会話前方指示引用文+:

[2.2.1.1.1] 前文が会話文+: その会話を埋め込む。

[2.2.1.1.2] 前文が会話文-: ?.

[2.2.1.2] 会話前方指示引用文-:

[2.2.1.2.1] 前文が会話文+: 処理中の会話述語文を保持する。
(\$ 前文の会話を埋め込む)

[2.2.1.2.2] 前文が会話文-:

[2.2.1.2.2.1] 前文が会話述語文+:

[2.2.1.2.2.1.1] 前前文が会話文+：前前文を前文に埋め込み、処理中の会話述語文を保持する。
(\$?)

[2.2.1.2.2.1.2] 前前文が会話文-： ?.

[2.2.1.2.2.2] 前文が会話述語文-：処理中の会話述語文を保持する。
(\$?)

[2.2.2] 会話述語文-：

[2.2.2.1] 前文が会話文+：その会話文を独立引用とし、処理中の文を通常の文とする。

[2.2.2.2] 前文が会話文-：

[2.2.2.2.1] 前文が会話述語文+：

[2.2.2.2.1.1] 前前文が会話文+：前前文を前文に埋め込み、処理中の文を通常の文とする。

[2.2.2.2.1.2] 前前文が会話文-： ?.

[2.2.2.2.2] 前文が会話述語文-：通常の文とする。

”保持する”処理に付随している”(\$. . .)”は、処理中の文が文章の最後の文である場合に行うべき処理を意味している。”通常の文”として処理されるのは、会話文でなく、会話文を”と”引用してはず、かつ会話述語文でないような文である。”?”は文章の構成として不適当な場合である。また、文章の最初の文で前文が存在しない場合の処理は[1.2.2]，[2.2.1.1.2]，[2.2.1.2.2.2]，および[2.2.2.2.2]に含まれ、文章の最初の2文で前前文が存在しない場合の処理は[1.1.2.2]，[2.2.1.2.2.1.2]および[2.2.2.2.1.2]に含まれているとする。[1.1.1]，[2.1]，[2.2.1.1]が{(1)，(2)}類、それ以外がおおよそ{(3)，(4)}類の処理に対応する。保持された会話文と会話述語文は、文章解析処理が進んで、より後ろの文の処理から参照されることになる。また、処理の途中で保持されていた会話文が会話述語文に埋め込まれることによって、”前文”あるいは”前前文”の指示対象は動的に変化し、会話述語文が会話文を埋め込みうるかどうかとも変化する。そのような動的な処理は上の記述中には含まれていないので、次に示す解析例を通して説明する。

<8> a. がまくんは、げんかんのまえにすわっていました。

b. かえるくんが、やってきていました。

c. 「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」

d. 「うん、そうなんだ。」

e. がまくんがいました。

f. 「いま、一日のうちのかなしいときなんだ。つまり、おてがみをまつじかんなんだ。そうなる、いつもぼく、とてもふしあわせな気持ちになるんだよ。」

g. 「そりゃ、どういうわけ。」

h. かえるくんがたずねました。

文を最初から順番に処理してゆく。[]は手続き中の処理個所を示す。{ }は処理された文から構成されるリストである。現在処理中の文から、前文あるいは前前文への参照はこのリストのトップレベルの文に対して行われる。また、この文章は文hが最終文であると仮定する。

1> a. : [2.2.2.2.2.2] 前文が存在しない場合もここで処理されるとしている。

{a}

2> b. : [2.2.1.2.2.2] (会話文を埋め込みうる) 会話述語文であることの印(*)をつけて保持する。

{a, *b}

3> c. : [1.1.2.2] bにcを埋め込み、bから*印を取る。

{a, b(c)}

- 4> d. : cは前の処理でbに埋め込まれたので、この時点で前文はcを埋め込んだbである。従って、
 [1. 2. 2]により会話文であることの印(＃)をつけて保持する。
 {a, b(c), #d}
- 5> e. : [2. 2. 1. 2. 1] 会話述語文であることの印をつけて保持する。
 {a, b(c), #d, *e}
- 6> f. : [1. 1. 2. 1. 1] fをdとともにeに埋め込むことが可能なので、dとfを結合してeに埋め込み、eから会話述語文であることの印を取る。
 {a, b(c), e(d, f)}
- 7> g. : [1. 2. 2]により会話文保持。
 {a, b(c), e(d, f), #g}
- 8> h. : [2. 2. 1. 2. 1(*)] この文章がこの文で終わっているという仮定から、gをhに埋め込むことができる。
 {a, b(c), e(d, f), h(g)}

aから通常の文としての枠組み、b(c)、e(d, f)、h(g)から会話文枠組みが構成され、この文章の意味構造を構成する基本構成要素となる。

本章で述べた手続きによって会話文を”埋め込む”べき地の文が決まった後は、まずその地の文の表層レベルの情報のみからなる枠組みを構成し、それに必須構成要素が不足している場合には、文脈情報を利用してそれを補充する復元処理を行わなければならない。「述部省略」と「引用」の場合は<述部>、「独立引用」の場合はすべての必須構成要素を復元しなければならない。もちろん、会話文と関与する地の文(会話述語文)以外の通常の文の枠組み構成にあっても必要に応じて復元処理を行わなければならない。このような復元処理においては文脈情報を利用した意味処理が必須であり、それが上の骨組み的手続きに付加されなければならない。それとは別に、上の手続き中には、会話文と会話文、および会話文と地の文章との間の本質的な意味処理を行わなければならない部分が含まれている。それは、[1. 1. 2. 1]に含まれる処理である。そこでは、分離している会話文を結合できるかどうか、また処理中の会話文を前文である会話述語文に埋め込めるかどうかの判定を行わなければならない。次章でこの問題について考察する。

5. 会話文の結合と埋め込み可能性

前章で構成した会話文枠組み構成手続き中に含まれる処理で最も重要な処理の一つは、「会話文(1)－会話述語文－会話文(2)」というパターンにおいて「会話文(1)と会話文(2)を結合する」という処理である。これは、3章での類型(3. 3)に対応する。そこで、まず、(3. 3)の類型において前後の会話文の間にどのような関係が存在するかということについて考察する。これは、本来、ひとつの会話文にまとめることのできるものを二つに分割したものと考えることができる。どのような分割が存在しうるであろうか。逆に言うと、二つの会話文の間にどのような関係が存在したら、分割された二つの会話文を一つにまとめて、それらの間の会話述語文に連用修飾語句として埋め込み、一つの会話文枠組みを構成することができるであろうか。まず、具体例について考えてみよう。会話述語文をはきんで、前の文を前文、後の文を後文と呼ぶことにする。

- <9> a. 「かたつむりくん。」
 b. かえるくんがいました。
 c. 「おねがいけど、このてがみをがまくんのいえへもって行って、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」
 d. 「まかせてくれよ。」

e. かたつむりくんがいました。

f. 「すぐやるぜ。」

aとcを結合してbに、dとfを結合してeに埋め込むことができる。たとえば、[d, e, f]については、その会話文枠組みを次のように構成することができる。

[<かたつむりくんが>, <かえるくんに>, 「まかせてくれよ。すぐやるぜ。」と, <いました>]。

これらの例において、前文と後文の間には、どのような接続関係があるだろうか。

[a, b, c] : 前文(a) : 呼びかけ - 後文(c) : 具体的内容 ; 依頼

[d, e, f] : 前文(d) : 直接的応答 - 後文(f) : 付加情報 ; 意志

[a, b, c]と[d, e, f]の間には、“依頼” - “応答”という関係がある。これと似たパターンとして、次のようなものがある。

“提案”[呼びかけ-具体的内容; 提案] - “応答”[直接的応答-付加情報; 理由]

“説得”[呼びかけ-具体的内容; 説得] - “応答”[直接的応答-付加情報; 理由]

この他に、上のパターンの後半部の分割について、実際の資料の調査・検討により以下に示すような関係が抽出された。

C 1	:	C 2 1	-	C 2 2
A. 相手の状態の確認	:	直接的応答	-	付加情報・理由
B. 質問	:	直接的応答	-	付加情報・感想/説明
C. ある事に関する信念	:	同じ事に関する異なる信念	-	理由
D. 事実	:	反復・確認	-	事実の内容について
E. 事柄	:	感嘆(詞)	-	感嘆の内容
F. 行為の決断	:	禁止	-	理由

会話述語文をはさんで、二つの会話文そのものの解析の結果、それらがここで抽出したような接続関係にある場合には、それらを結合して一つの会話文枠組みを構成することができる。大前提は、二つの会話文の会話主体が同じでなければならないということである。これは引き続き文章からの情報も考慮しなければ処理不可能な場合もあるが、逆に、上のような関係にあるときはおよそ二つの会話文の会話主体は同じであるとも考えることができる。

それでは次に、会話文(1)か会話文(2)のいずれか一方のみを会話述語文に埋め込む場合のうち、会話文(1)を会話述語文に埋め込み、会話文(2)を保持する場合について検討してみよう。

<10>a. 「あら、マーくん、かさがないの。いっしょにかえりましょう。」

b. 小さな男の子のともだちの、小さな女の子がきて、いました。

c. 「あめがふったらボンボロロン、あめがふったらビッチャンチャン。」

d. ふたりは、大きなこえでうたいながら、あめの中をかえっていきました。

aは女の子による提案、cは男の子と女の子による歌。aが女の子の言いまわしであることや会話述語文の会話主体が“女の子”であることが手がかりとなる。

<11>a. 「そりゃ、どういうわけ。」

b. かえるくんがたずねました。

c. 「だって、ぼく、おてがみもらったことないんだもの。」

d. がまくんがいました。

aは質問、cは応答。aが質問であることに対して、会話述語文の述部が“たずねました”であることが手がかりとなる。

<12>a. 「ろくべえ。がんばれ。」

b. えいじくんが、大きな声でさけびました。

c. 「ワンワン。」

d. うれしいのか、ろくべえの鳴き声は、前より大きくなりました。

a は呼びかけ・激励，c は犬の鳴き声（応答）。会話述語文における会話主体は”えいじくん（人間）”で、普通、人間は”ワンワン”とは叫ばない。

<13>a. 「ぼくを、ぜんまいねずみにかえられるってほんと？」

b. アレクサンダは、ふるえ声できいた。

c. 「月がまんまるの時、」

d. とかげはいった。

e. 「むらさきの小石をもっておいで。」

a が質問，それに対して会話述語文の述部が”きいた”である。c の終わりが”，”であり，c は後ろへつながる。これは翻訳文章からの例である。

以上，いくつかの例を示したが，問題となっている，会話文（1）－会話述語文－会話文（2）というパターンにおいて，結合処理によって前後二つの会話文を間の会話述語文に埋め込む処理ができない場合は，会話文（1）を会話述語文に埋め込む処理が大部分であると思われる。少なくとも本報告が対象とした資料中では，ほとんどがその処理であった。そしてここでも会話文（1）と会話文（2）の間の接続関係が重要な手がかりとなる。提案－応答，質問－応答，呼びかけ・激励－応答，命令－応答などで，分離しておく方が自然な関係である。さらに，会話文と会話述語文の間の意味的關係や常識的知識も重要な手がかりを与える。

6. 会話文枠組みにおける必須構成要素の復元

最も基本的な会話文枠組みとして，[I] 類の枠組みを考えると，その省略される可能性のある必須構成要素は，<会話主体>と<会話相手>と<述部>である。3章でのそれぞれの場合について考えると，（1，2）は<述部>，（4）は<会話主体>，<会話相手>そして<述部>が省略されているパターンそのものであり，その他においては，<会話主体>と<会話相手>が省略される可能性がある。いずれの場合においても，省略されている要素は文脈から復元可能なはずのものである。文脈情報は，前章での考察も考慮して，おおよそ次のように分類されるであろう。

<イ>（会話をするこゝのできる）登場物のリスト。

<ロ>会話文そのものからの情報。

<ハ>会話文が埋め込まれている文あるいは埋め込まれる文（会話述語文）からの情報。

<ニ>地の文章からの様々な情報。

7. おわりに

本報告で構成した骨組みの会話文枠組み構成手続きにおいては個々の会話文の解析が可能であることを仮定しているが，会話文の内容そのものの解析についても，まだ多くの問題が残されている。また，5章での，会話文と地の文章との間の意味的關係についての記述的考察を具体的な処理手続きとして構成および実現してゆくことも今後の大きな課題である。

8. 参考文献

1) 永野賢：文章論総説，朝倉書店，1986。

2) 三上章：日本語の構文，くろしお出版，1963。

3) 国立国語研究所（寺村秀夫）：日本語の文法（下），大蔵省印刷局，1982。